

復活させられたイエスが弟子たちに現れた時、トマスはいませんでした。弟子たちが「わたしは主を見た」と言うと、トマスは「イエスの手とわき腹の傷を見て、触れなければ、決して信じない」と言いました。1週間後の日曜日、弟子たちとトマスは前と同じ家で鍵をかけていました。イエスはトマスに「私の手とわき腹に触れてみなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言いました。彼はかつて「私たちも行って、一緒に死のうではないか」とまで言いました。しかし実際にイエスの十字架を目の当たりにした時、自分は決してイエスのために死ぬことができるような人間ではないことを思い知らされ、悶々としていたのではないのでしょうか。彼がイエスの傷跡を見た瞬間、そのような自分のためにイエスは十字架に架かったことに気づいたのです。彼はもうイエスに触れる必要はありませんでした。このイエスの愛に触れた時に、彼は「わたしの主、わたしの神よ」と告白しました。著者はここまで読んできた読者にトマスと同じようにイエスを「わたしの主、わたしの神」と告白することを期待しているのです。この福音書のイエス理解は神と等しい者イエスであり、トマスはこの信仰と告白の担い手として記されています。ここにもイエスの十字架を境にして、その前にイエスを見捨てた弟子がその後はイエスの宣教を開始したという事実があります。そして、弟子の行動にこのような転換が起こった原因として考え得るのは彼が復活させられたイエスに出会ったという体験を持ったことだけなのです。一世紀末のヨハネの共同体の殆どの人たちは生前のイエスや復活させられたイエスに出会ったことのない、イエスの言葉や行いについての伝承を聞き、見ないで信じた人たちでした。従って「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」という言葉は、トマスに対する非難ではなく、復活させられたイエスを直接見ることがない人にも神さまからの祝福がある、という意味です。私たちは弟子たちのように復活させられたイエスを見た者ではありません。しかし、私たちも、イエスが今も共に生きていと実感する場合があります。私たちは、信仰を通して、自分と共に生きているイエスと出会ったのです。今もイエスは共に生きています。私たちは、今も生きています。イエスに出会い、イエスに委ねて歩むことを通して、イエスを主であり、神である方として告白するのです。